公開シンポジウム「流域で見る洪水ハザード」を開催

●大学院環境学研究科

公開シンポジウム「流域で見る洪水ハザード」が、４月15日（土）、環境総合館レクチャーホールにおいて、一般市民など約110名の参加を得て、開催されました。

このシンポジウムは、大学院環境学研究科地理学講座内の災害・防災学習カリキュラム開発委員会が主催したもので、本委員会は、主に水害に対する地域防災力の向上をめざして、行政・市民団体と協力しながら、市民向けの防災学習カリキュラムの開発を行っています。平成16年度からは、文部科学省生涯学習政策局や河川環境管理財団から助成を受け、天白川を対象に調査・研究を行っています。

ロビーに展示されたハザードマップを見る来場者

シンポジウムでは、岡本耕平環境学研究科教授による趣旨説明の後、中村太士北海道大学教授による「河川環境を流域の視点から考える」、松尾直規中部大学教授による「洪水ハザードマップの作成方法」と題する２つの講演が行われました。その後、廣内大助愛知工業大学地域防災研究センター研究員が天白川流域住民へのアンケート調査結果について報告しました。このアンケートは、災害・防災学習カリキュラム開発委員会が、名古屋市と日進市の天白川流域住民に対して実施したもので、約6,500世帯から回答がありました。特に日進市民向けのアンケートでは、ハザードマップに記載すべき情報について尋ねており、同市洪水ハザードマップにはこの調査結果が生かされています。会場では、印刷されたばかりのハザードマップが配布され、日進市防災安全課長の鈴木正敏氏が作成過程を説明しました。最後に、大西宏治富山大学助教授の司会でパネルディスカッションが行われ、パネリストとして、岡本、中村、松尾教授、鈴木氏に、市民団体「市民がつくる災害に強いまちづくりの集い」の谷川　修氏、愛知県河川課の向井克之氏が加わり、参加者からの意見・質問票をもとに議論を行いました。

留学生に向けた地震防災対策

●留学生センター

留学生センターでは、留学生の生活支援の一環として10年以上にわたって地震防災対策セミナーやワークショップを開催しています。災害対策室が設置されてからは専門的な支援も得られるようになり、多文化環境を意識した防災体制作りが、大学で始まっています。

1995年の阪神大震災での経験では、外国籍住民が犠牲になる割合が他の住民よりも高く、言語・文化の壁は情報弱者そして災害弱者を生みやすいことが知られています（この時の留学生たちの様子は、地震の３ヶ月後の留学生56人の手記をまとめて出版された『忘れられない…あの日～神戸からの声』（留学生震災文集委員会）で詳しく知ることができます。）。

本学に在籍する約1,200名の留学生は、地震多発地域から来て訓練を受けている人、地震のイメージさえ持たない人など様々で、留学生向け防災対策といっても一様ではありません。４月10日（月）に行われた、研究協力・国際部国際課による新入留学生オリエンテーションでは、災害対策室作成の地震防災ガイド（日本語版･英語版）を配布し、大地震への日頃の準備と、いざという時の心得を伝えました。また、５月30日（火）に開催された留学生のためのセミナーでは、センターと災害対策室が協力してワークショップを行い、映像やクイズを用いながら、地震についての想像力を鍛える催しを行いました。

いつ起こってもおかしくない大地震に備え、本学の構成員皆が「人事を尽くして天命を待つ」の気持ちになれる体制作りのために、大学全体の連携が急務となっています。